

【介護から自分を知る⑰】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

(3) 個別対応—認知症以外

認知症の状態を考えて見ることで、多くのケースはそれを変化させながら検討すれば良いと思いますので、今までの記述を参考にいただければと思います。

具体的なケースで判断することが必要ですが、その種類はケースごとに異なりますので、ある程度分類した状態で説明します。なお、検討する時は全てが同じということで捉えないようにしてください。

介護度がある場合は、その状態になった経緯がある程度外からも見えることで判定がされているものと思われますので、その内容を確認することから始めれば何らかのことが判明するものと思われます。

気をつける必要があるのは、病気入院していたことにより介護度が判定されたのか、それとも在宅で特に大きな疾病がなくて介護度が判定されたのかで捉えかたが異なってきます。もう一つは、リハビリを行なうことである程度の回復が期待できる状態なのかでも変わってきます。

リハビリはどの場合でも必要ですが、その内容は人によって大きく異なりますから注意する必要があります。的確なリハビリが求められますので、専門家の意見によって実施することが大切です。そのことによって機能の低下を防ぐことも期待できます。また、低下を遅らすことも出来ますのでその内容については十分検討する必要があります。

高齢者にとっては、今後の人生に大きく影響を与えることになりますから、無理をしないで毎日継続させることに重点を置いたものでなければなりません。気ままな状態では、自分で自分を苦しめることになってしまいますので、家族等の支えが必要になるのかもしれない。

人は理解しないと行動に移ることが難しいと思います。そのために客観的な説明が必要であり、何回も話をしてでも理解していただくことが大切です。根気のいることかもしれませんが大事な第一歩ですので注意してください。

理解がないままに時間が経過することは、適切な生活を拒否したことに繋がります、けして前向きな生活とはいえません。一時的には変化が無いかも知れませんが、問題の先送りであり、貴重な時間が無駄に経過することになってしまいます。痛みと病気の重度化にも繋がり高齢者が苦しむことになり、介護者にとっても厳しい環境に置かれることに繋がりますので、そのことも十分理解した行動が求められます。

高齢者の状態が今どうなのか、これからの予測を含めて、どう向き合っ

活していくのかを、高齢者、家族等が理解することから介護の実情が変わってきます。そのことを考えることに慣れていないのが現実ですので、時間が掛かるかもしれませんが諦めないで進めてください。